

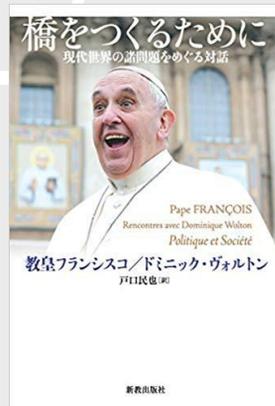
真生会館 学び合いの会 分科会
教皇フランシスコの思想

Building bridges between peoples and individuals

その1: Church and State

2020.03.21

齋藤旬



1

2020年分科会テーマ：『Laudato Si'英語版の精読 ～～ 科学と宗教の両立』

回勅[ラウダート・シ](#)は、scienceとreligionを両立するものとして認めその両方を駆使して温暖化など地球環境破壊をくい止めようと警鐘を鳴らす。Laudato Si'、特にその[英語版](#)は異例なほどscienceに言及している。そこに教皇はどの様な思いを込めたのか、7月以降に探っていく。

その前3月、5月は、昨年行った「popular movements大会教皇メッセージ2014,2015,2016,2017読解」の[要約](#)を行う。昨年2019年分科会は、[5月](#)：2014年大会メッセージ「社会構造による罪」、[7月](#)：2015年大会メッセージ「popular economyとは何か ～経済的実体法理～」、[9月](#)：2016年大会メッセージ「ニセの預言者に打ち勝つには」、[11月](#)：2017年大会メッセージ「新たな社会経済システムを目指して」を精読した。

要約をもし、ひと言で言えば2017年メッセージ第二段落にある「building bridges between peoples and individuals」。折り良く昨年5月『[橋をつくるために](#) 現代世界の諸問題をめぐる対話』が出版された。これは2018年11月分科会で触れた『[Pope Francis, Future of Faith](#)』の和訳。原著は仏語、既に20カ国語に翻訳されたそうだ。この本の仏ジャーナリスト、ドミニク・ヴォルトンとの対話のなかで、教皇がbuilding bridgesについて説明している。例えば教皇（ラテン語でPontifex）とは元々、橋（ponti）を作る（fex）人という意味だと説明している。

具体的にbridgesとは何か。2018年分科会、2019年分科会などで取り上げた教皇のことばに見いだした「bridges」を、15個拾い上げ、次頁にまとめた。次頁の図では、全て教皇の発言から表現方法を拾った。今回3月は概観を見るだけに留め、次回5月に一つ一つ取り上げたい。

「building bridges between peoples and individuals」は、文字通りpeoples and individualsの協調を図るもの。勿論、科学と宗教の両立・協調も含む。従って、これは自然に今年2020年分科会テーマ：『Laudato Si'英語版の精読 ～～ 科学と宗教の両立』への導入となっている。

1

bridges between peoples and individuals

	peoples	bridges	individuals
1	goodness	common good	justice
2	dignity	human dignity	human
3	rights	human rights	human
4	person	human person	human
5	nation or diaspora	enforceable international agreements	state
6	partnership	hybrid entity (LLC)	corporate
7	freedom	freedom to develop the capabilities	liberty
8	wisdom & beauty	quantum leap	knowledge
9	the lawful	the law of graduality	the legal
10	religions	dialogue on the metaphysics of quantum physics	science
11	mutual respect	?	money
12	fitting distribution	popular economy	current economy
13	covenant	non-money consideration	contract
14	obligation	humane alternative	duty
15	independence	not concerned simply with paying their taxes, but in their own quiet way sustain the life of society	tax
16	persona	persona sui juris (legal person)	juris

We need not walls but bridges, because everything is interconnected.

Individuals who happen to be caught up in that system, you love, but you seek to defeat the system...

2

bridges between peoples and individuals、これは元々、2017年PM大会メッセージ「新たな社会経済システムを目指して」第二段落で教皇が発言した、「・・・そしてタークソン枢機卿、ありがとうございます。あなたの継続的支援により、新たに高次統合人類発展市民評議会（Dicastery for the Promotion of Integral Human Development）が生まれ、popular movementsが促進されました。皆さんが一緒になって努力しsocial justice に向かって進んでいる。これは私をととても幸せにします。この様な建設的なエネルギーが全ての教区に広がるのを、私は待ち望んでいます。そうなれば、peoplesとindividualsの間に橋を架けること（it builds bridges between peoples and individuals）が出来るからです。この様な橋が、排斥、無関心、人種差別、不寛容といった数々の壁を乗り越えさせてくれるからです。・・・」にある表現。（なお、私の[ブログのここ](#)でも説明をしているので宜しかったらご覧頂きたい。）

Individualsとは、図の右側に青字で示した様なevil systems(悪の社会経済システム)に偶然に絡め取られてしまった人々のこと。教皇は2016PM大会メッセージ最後から二段落目およびAmoris Laetitia 118とで、キング牧師の以下の発言を紹介し、Individualsとは何かを説明している。

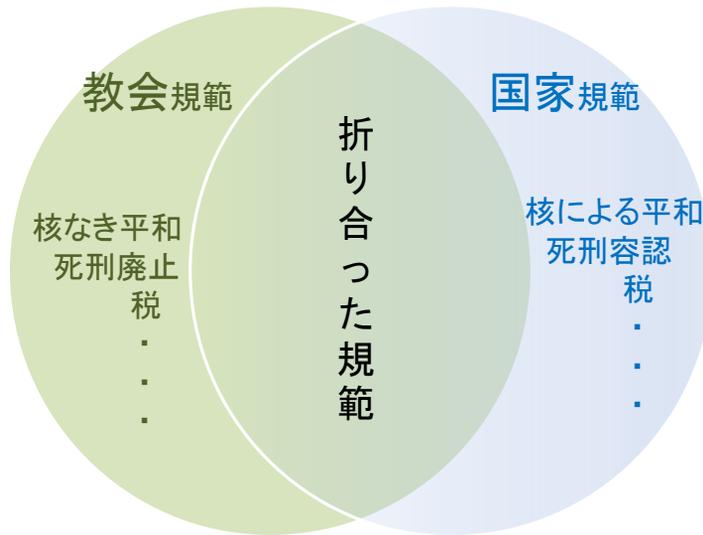
「愛の美と力の水準にまで登りつめるとき、貴方方はただevil systemsだけは打ち倒そうとするようになる。このsystemに偶然によって絡め取られたindividualsを、愛しながらも、このsystemだけは打ち倒さなければならないと思うようになる。」

peoplesとは何か、これはpersonの複数形の複数形であり、the people（キリスト教でいう「神の民」）とも意味が少し違う。2015PM大会で紹介された「多辺体のたとえ」が参考になる。

『多辺体のたとえ』：peoples and culturesの違いをそのままに残してしかも一緒にしようとする皆さんの努力に感謝します。或る種の共生（coexistence）形態、私はこれを多辺体（polyhedric, many-sided）と呼ぶのですが、その中で各グループはa plurality（一つの複数人）を形成し自分達のidentityを保ちつつ、しかもunity（全体が一つになること）を脅かすことなくむしろ強化しています。この様なan interculturalismを求める皆さんのquest（探求の旅）は、native peoplesが持つ諸権利を防衛しつつ各国家が持つ領土保全を尊重するという絶妙の組合せであり、私達全員にとって豊かな励ましの源となっています。

Church and State

社会 = 教会 + 国家



Duo Sunt

両権社会 : 互いに治外法権

3

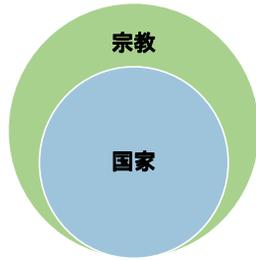
フランシスコ教皇のbridges思想の原型は、イエスの言葉「神のものは神に、カエサルのものはカエサルに」を起源とするChurch and State原理だ。この原理では、人間社会 (society) は教会と国家から構成されると考える。即ち社会規範は、教会規範と国家規範から構成されると考える。ここで、両者の規範が完全には合致していないことに注意。折り合わない規範においては、互いに治外法権となる。つまり両者とも、相手が自分の規範に反したからといって罰することはできない。この様な社会を「両権社会」、ラテン語でDuo Suntと言う。

Church and State原理と、bridgesの考え方とを比べてみよう。似ているが違いがある。大きな違いは、教会と国家という「組織」から、peoplesとindividualsという「人間達」へと視点を移した点。この背景には、国家という「組織」が教会 (宗教) という組織の枝葉の考え方は受け入れてもその本質 — 例えば「核なき平和」を受け入れることが決して無い、ということがある。つまり両組織の「折り合い」は、ある程度進んだ後どこかで必ずストップする。折衷は膠着状態に必ず陥る。なぜなら、国家は例えば「核の傘の下にいるから国家は安泰でいられる」という「核による平和」論理から決して離れない。国家はその存立原理である近代合理主義により、主観的相互信頼よりも客観的power balanceによって平和を維持しようとする。従っていったん急あれば自国第一主義に陥り、他国を滅ぼしてでも自国の存在を守ろうとする。

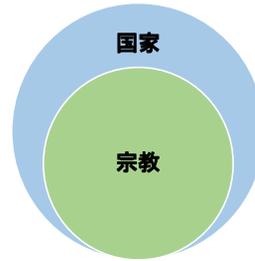
しかし人間達は違う。一人一人の人間は機械ロボットではない。心を持っている。様々な心を持っている。ひとりひとり誰もが、peoples的心とindividuals的心と合わせ持っている。一人の人が、scienceもreligionも深く理解することがある。the legalもthe lawfulも深く理解することもある。誰も、国家の一律一様な規範に心の底から良いと思って従っているわけではない。より良い規範あるいは秩序があるはずだと思っている。極端に言えば、もし国家がなくても安心して豊かに活動的に暮らしていけるのであれば「国家」は無くてもよいと思うだろう。そうなれば「核の傘」は必要なくなり「核なき平和」が現実のものとなる。この様に、組織同士の折り合いから人間同士の折り合いに「折衷」の舞台を変えることによって、折り合い (折衷) が更に進む可能性が出てくる。

宗教と国家の包含関係

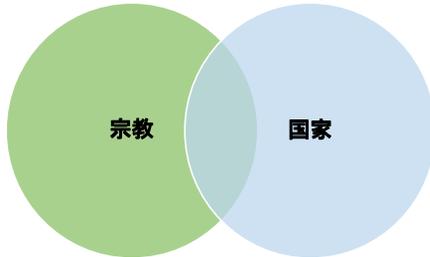
single religion major
単一宗教主流型



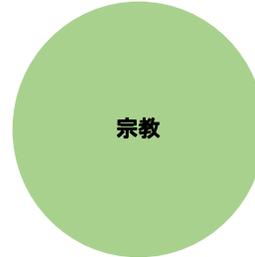
caesaropapism
ケイサロパピズム型



Duo Sunt
デュオスント型



diaspora
ディアスポラ型



4

フランシスコ教皇の考え方の基本は「所属する国家や宗教の「組織の論理」よりも一人一人が持つ「各自の良心」を大切に、難局に当たってどうすべきか判断する。それが環境問題、平和問題、格差問題、難民問題などなどの解決策」というもの。言い換えれば、現在の地球上の各「社会」は、人々の考えを規制する「規範」を各自の良心ではなく国家と宗教が与えている。

現在の地球上の様々な地域で、国家と宗教がどのような「包含関係」をもって規範を与えているか、まとめてみた。一般に二つの集合の包含関係は五分類となるが、人間は（少なくとも現在の）合理主義あるいは科学では説明がつかない「こころ」を持つので、「国家=宗教」とピッタリ重なることはない。従って四分類となる。同じ理由で、図の右下（ディアスポラ型）では宗教と重なる部分を持たない国家は在り得ないことになる。もし在ったとしたら「心を解さずロジックだけを受け入れる機械ロボットのような者達が住んでいる国家」ということになるだろう。それは在ってはならない。従って右下のディアスポラ型には国家を描き入れていない。

左上、単一宗教主流型：例えば現在のイラン。立法・司法・行政において大統領など国家政治主導者よりも宗教指導者の方が権限が強い。イスラム教社会に多く見られる。

左下、デュオスント型：現在の西欧、北米、南米など[Western Christianity](#)（カトリックとプロテスタント）の影響下にある地域に多く見られる。前頁で説明した、イエスの言葉「神のものは神に、カエサルのはカエサルに」を起源とするChurch and State原理による社会。

右上、ケイサロパピズム型：現在のロシア、東部ウクライナなど正教会（オルソドクス）の影響下にある地域に多く見られる。日本もこの型に分類できるかもしれない。典型的にはCaesar（シーザー、ケイサル、国家政治主導者）がPope（主教者、宗教指導者）の任命権限を持つ。

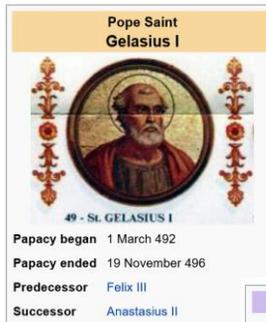
右下、ディアスポラ型：現在のクルド人社会、ロヒンギャ民族社会。“国家を持たぬ民” 元々は、ユダヤ民族が古代ローマ帝国への納税を拒否し続けたため古代ローマ帝国の領土から追放されこの名称ができた。現在、ディアスポラ型社会は数は少ない。イスラム社会に稀に現れる。

Duo Sunt: Two There Are、両権

西暦476年、古代ローマ帝国のゲルマン傭兵隊長オドアケル(キリスト教徒)の謀反によりローマ皇帝が追放され西ローマ帝国が崩壊した。18年後の西暦494年、ローマを逃れコンスタンチノーブルに退避していた東ローマ皇帝アナスタシウスに宛て、教皇ジェラシウスは、Duo suntと呼ばれる論考書簡を書き送った。

書簡はsovereign immunityとcrown immunity、則ち、教皇と皇帝は法的に誤ることがなく、教会からも帝国(国家)からも罪科を免除されるという法理の確立に貢献した。この法理では、papacy(教皇のキリスト教教導権)とmonarchy(皇帝の国家(帝国)統治権)とが、お互いにjurisdictions(法治領域)を侵害しないことを約束し合い、相互に政治的保護を奉じ合う。(互いに治外法権)

これらの法理は、今で言うChurch-State原理につながり、その後長きにわたり西洋社会の政治形態に大きな影響を与えた。



Duo Sunt書簡



Source: Wikipedia

5

これは、キリスト教「社会」の根幹を成すChurch and State (教会と国家) の考え方を述べた、カトリック論文の最初のもの。西暦494年。西ローマ帝国崩壊(476年)の直後に出された論考。

これが出された経緯を四段階に説明する。参考にしたのは、Joseph F. Costanzo S.J.著.:The Historical Credibility of Hans Kung www.ewtn.com/library/THEOLOGY/KUNGINF.HTM#5 等。Church and State 研究者にはKetteler, Weber, Kung等のドイツ語圏の人が多く、と私は感じる。

1. 西暦1,2,3世紀、ローマ帝国への納税を頑なに拒むユダヤ教徒と違い、「神のものは神にカエサルのもものはカエサルに」の教義に導かれたキリスト教徒は、ローマ帝国への納税に大きな抵抗は無かった。これは、古代ローマ帝国にとって好ましいものだった。つまりドーバー海峡以北のブリトンの地と、ライン川以東のゲルマンの地とに領土を広げようとする古代ローマ帝国にとって、これら辺境地のキリスト教化は好ましいものだった。禁教とされていたキリスト教が、4世紀の313年のミラノ勅令等により古代ローマ帝国の「国教」となる。
2. 独語と英語に、「正」「罪」「義務」「自由」等を意味する言葉が二種類、備わるようになっていく。ローマ帝国が言っていることとキリスト教が言っていることを区別できるようになっていく。ゲルマン人とブリトン人の「心」に、世俗倫理と宗教倫理とが拮抗併存する精神構造が形成されていく。
3. 5世紀末、キリスト教的分権自律精神 - 共通善の下に連帯しつつ個々の独自性を大切にする精神 -- が広まると共にローマ帝国の中央集権力は弱まり、476年ついに、世俗倫理と宗教倫理とを併せ持つゲルマン傭兵隊長オドアケルがローマ皇帝をローマから追放しコンスタンチノーブルの地へと追いやる。
4. コンスタンチノーブルを中心に東ローマ帝国が設立される。世俗倫理と宗教倫理との並立に懲りた東ローマ皇帝Anastasiusは、所謂ケイサロパピズム(皇帝教皇主義、中央集権)を形成し、皇帝権威の中に宗教権威を取り込んでいく。以降、東欧において両倫理の違いが減少。

その約500年後、ケイサロパピズムの下にあるオルソドクス(ロシア正教、ギリシャ正教等)がDuo Sunt(両権論)の下にあるカトリックから分離。また、476年に滅亡した西ローマ帝国に比べ東ローマ帝国は1453年の滅亡まで約千年間も長生きした。Duo Sunt(両権論)よりもケイサロパピズム(皇帝教皇主義)のほうが、国家安定だけを考えるなら適しているのかもしれない。

5

bridge 4: human person

Laudato Si' 240 被造物間の関係性と三位一体

The divine Persons are subsistent relations, and the world, created according to the divine model, is a web of relationships.

Creatures tend towards God, and in turn it is proper to every living being to tend towards other things, so that throughout the universe we can find any number of constant and secretly interwoven relationships. (Cf. THOMAS AQUINAS, *Summa Theologiae*, I, q. 11, art. 3; q. 21, art. 1, ad 3; q. 47, art. 3.)

This leads us not only to marvel at the manifold connections existing among creatures, but also to discover a key to our own fulfillment.

The human person grows more, matures more and is sanctified more to the extent that he or she enters into relationships, going out from themselves to live in communion with God, with others and with all creatures.

In this way, they make their own that trinitarian dynamism which God imprinted in them when they were created.

Everything is interconnected, and this invites us to develop a spirituality of that global solidarity which flows from the mystery of the Trinity.

神のPersonsはsubsistent relations(自存する諸関係)です(*)。また地上世界は、神のこのモデルに従って創造されたのですから、relationshipsによって形成されるa webです。

被造物は、subsistent relationsである神へと向かう性質を持っています。同様に全生物が、他者へと向かう性質を持っています。ですからこの宇宙の至る所に、幾つもの恒常的なrelationshipsが密かに織り込まれているのです。(トマス・アキナス著 高田三郎訳『神学大全1』創文社、1960年、201-204頁、同『神学大全2』、1963年、216-217頁、同『神学大全4』、1973年、83-86頁)

このようなrelationshipsが、重層的なconnectionsが被造物の間にあることの神秘を私達に気づかせてくれるだけでなく、私達自身の自己実現を開く鍵、これを覆っているカバーを取り除いてくれるのです。

人間のペルソナは、relationshipsに参加すれば参加するだけ、いっそう成長し、いっそう成熟し、いっそう聖化されます。自分自身の殻から抜け出し、神との交わり、他者との交わり、全被造物との交わりの中に生きるならば、いっそう聖化されます。

こうして全被造物は、創造の際に神が刻印したあの三位一体のダイナミズムを自らのものとします。

Everything is interconnected. 正にこのことが、本回動で説明した、三位一体の神秘から流れ出るglobal solidarityの豊性、これをはぐむよう私達を招いているのです。

(*): 神のPersons(位格、ペルソナ)を、「自存する関係(relatio ut subsistens)」と定義したトマス・アキナスは、「神のペルソナの意味のうちには関係(relatio)が含まれていて、それに対して、天使や人間のペルソナの意味のうちには関係は含まれていない」と述べている。これは決して人間の関係構築能力を否定しているのではない。確かに神は、父と子と聖霊という三つのPersonsの一なる交わりが自ずと成立している「存在の充実(plentitudo essendi)」そのものである。しかし人間も、意志的・選択的に、偶然的な外界や他者との関わりの中でその様なrelationsを構築するならば、「存在の充実」を時間的・過渡的に得ることができるのである。(山本芳久著『トマス・アキナスによる人格(ペルソナ)の存在論』2004年博士論文、2013年増補出版、271頁等参照方)

6

bridges between peoples and individualsの具体例を、次回(5月)は一つ一つ説明する予定だが、今回(3月)は一つだけ紹介する。bridge 4: human person。普通に和訳すると「人間」となってしまうそうだが、教皇はもっと深遠な意味をこのhuman personに込めている。

Laudato Si'の240節にその説明がある。ここは第六章第七段「被造物間の関係性と三位一体」を説明する238,239,240節の終節。LS全246節の中で最も大事だと思う節を一つ挙げるとしたら何処?と私がもし問われたらここを挙げる。特に最後のEverything is...の文章が大事だと思う。

ペルソナとは何か、説明が[山本芳久氏著作](#)8頁の脚注14)に載っている。次頁に渡り転載する。

14) 「三位一体(trinitas)」とは、古代ローマ帝国末期の教理論争の中で成立したキリスト教の基本的な教えの一つ。一言で言うとそれは、父なる神と子なる神と聖霊なる神が、それぞれ自立した存在 ---- これが「ペルソナ・位格(persona)」という言葉によって指示されている ---- でありながら、「本質(essentia)」は一つである、ということの意味している。そしてキリスト論においては、歴史的に生き活動した「一つのペルソナ」であるイエス・キリストが、「神的本性」と「人間本性」という二つの「本性(natura)」を担っているという考え方が、正統的な教理として確立した。そして、この様な経緯で成立したペルソナ概念は、後に、キリスト教の教理との明示的なつながりを失い、そのことを通じて、哲学、法学、心理学、社会学などの諸分野における専門的な概念として、また、卑近な日常用語として、使われるようになった。なお、この様な神学固有の問題については、本書においては、主題的には言及しない。

神学的な概念としてのpersonaは、元来は、キリスト論・三位一体論上の術語であって、神の全体としての特質を表現するような述語ではなかった。この様な経緯に関して、加藤信朗氏は次の様に述べている。「古代と中世の教会では、この言葉は三位一体論上の術語であり、神を一般的に特徴づける神学上の述語ではなかったということが分かります。ここでアウグスティヌスの場合を少し考えてみますと、アウグスティヌスが神を特徴づける呼び名は「自分のいちばん高いところよりもさらに高いもの、自分のいちばん深いところよりもさらに深いもの」という言葉でした。神はそういうものであり、そういう意味で見えないもの、十分に掴み・

Everything is interconnected.

Laudato Si' 138 環境的、経済的、社会的なエコロジー

Ecology studies the relationship between living organisms and the environment in which they develop.

This necessarily entails reflection and debate about the conditions required for the life and survival of society, and the honesty needed to question certain models of development, production and consumption.

It cannot be emphasized enough how everything is interconnected.

Time and space are not independent of one another, and not even atoms or subatomic particles can be considered in isolation.

Just as the different aspects of the planet – physical, chemical and biological – are interrelated, so too living species are part of a network which we will never fully explore and understand.

A good part of our genetic code is shared by many living beings.

It follows that the fragmentation of knowledge and the isolation of bits of information can actually become a form of ignorance, unless they are integrated into a broader vision of reality

エコロジーとは、複数の生命体と、その複数の生命体が展開していく環境とのrelationshipを研究するものです。

この研究には必ず、society(人間社会)の存在と存続に必要な条件に関し深い考察と討議を行うことが伴います。ハッキリ言うのは避けませんが皆さん御存知のモデルによる開発・生産・消費が妥当なのかどうか、素直に問い直す必要があります。

なぜなら、どれほどeverything is interconnectedなのか、いくら主張しても主張しすぎることがないからです。

(例えば最新の科学では)時間と空間は互いに独立にあるものではなく、原子や素粒子でさえも、互いに関わりを感じないほど隔絶して存在しているのではないと考えられています。

ちょうどこの惑星の様々な側面 ---- 物理的・化学的・生物学的側面 ---- が関係し合って成立している(interrelated)のと同じ様に、様々な生物種もまた、私達には決して完全に調査し理解することができないa networkの一部なのです。

例えば、私達の遺伝子情報の大部分は、多くの生物と共有されています。

こうしたことを考えれば、知識の断片化や情報の細分化は、それらがもしrealityに関する更に広範なvisionへとintegrateされないのであれば、実際には何も知らないのと或る意味同じになってしまうと言えるのです。

7

・・みきることのできないものでした。……少し後の人であるポエティウスは、personaを定義して、「理性的な本性を持っている個別の実体 (naturae rationalis individua substantia, *De duobus naturis* 3)」としました。これがpersonaという語の古典的定義となり、中世の哲学者達はこれに従いました。そこから、知性と意志をそなえたものである神がpersonaであるというように説明されていく経緯があったと思います。しかし、ポエティウスのこの書物はキリスト論に関するものであって、一つのキリストのpersonaのうちに神の本性と人間の本性の二つの本性があることを説明しようとしているものでした。ですから、ここで定義されているpersonaという言葉は神のあり方を特徴づけるものとし、旧約の時代から人類にはたらきかけた神の救済の業を説明するのに用いようとする話がひどく分かりにくくなるように私には思えるのです。」(加藤信朗「現代に生きるキリスト教の使命：アジア・日本文化との接点を求めて」、聖心女子大学キリスト教文化研究所編「宗教と文化」17号、1996年、25-26頁)。加藤氏のこの説明は「人格神 (personal God)」という概念を軸に展開されている近代神学への批判として為されており、大枠において首肯しうるものであるが、中世の神学者であるトマスのうちには、古代末期に思索を進めていたアウグスティヌス (354-430) には見いだされない考え方、つまり、神全体のあり方をペルソナという言葉で捉えようとする考え方も、萌芽的な形ではあるが、見いだされうる。トマスは次の様に述べている。「知性によって三つのペルソナのペルソナ性を考慮の外に置くとしても、知性のうちにはなお、ユダヤ人達が解しているような神の一つのペルソナ性が残るであろう。」(神学大全III, q.3, a.3, ad 2) すなわち、神の全体的性格のうちに「ペルソナ性」を見いだす可能性をトマスは認めている。(以上、脚注14)

教皇が提唱するtheology of the people、bridges between peoples and individualsの基礎には、この様に長い間議論百出が続く「ペルソナ論」がある。神学関連の既存のテキストは参考にはなるが、直接に答えが書いてあるものではない。少なくともとりあえず私達がhuman personであると仮定して、私達がreflectionとdebateを行う必要が、何れにせよ、あるのではないか。

このスライド7で、“everything is interconnected”という考え方が最新の科学と関連があると、雰囲気をつかんで頂けたら幸いだ。「宗教と科学」については7月以降の分科会で扱う予定。